といわれている。本遺跡では、これらの陶器とともに、年代の判明する遺物に常滑の甕が存在する。この常滑の製品は、赤羽一郎氏の編年で、第3段階とされるものばかりである。したがって、先の藤沼氏の年代を追認する形となった。

今回は新に、従来知られていた窯の製品とは異なった2つのグループを抽出することができた。県内には、まだ未発見の窯があるものと考えられる。

また、これらの窯跡がどのような社会的背景のもとに消長したのか不明な点が多い。この点については、生産地である多高田窯は志田郡に、伊豆沼古窯は栗原郡に、そして東北窯はかつての刈田郡に属し、これらの諸郡はいずれも、鎌倉後半には北条氏の所領だった可能性のあるところである（小林・大石編：1978）。また、消費地である今泉城は名取郡に属し、この名取郡も北条氏の所領である。このような共通点は、おそらく偶然ではなく、中世窯業の成立に、北条氏あるいは、北条氏と関連する地元の領主層が関与していたことを推測させる。

生産地の問題、消費地の問題、そして流通・社会的背景など、まだまだ残された課題は多い。

4．今泉城をめぐって

今泉城を含む仙台市六郷地区[(1)]は、古代の陸奥国内においては、比較的早い時期に設置された名取郡内の地域である。

続日本紀　天平神護二(766)年十二月三十日の条に

陸奥国人正六上名取公龍麻呂賜姓名取朝臣

とあり、少なくとも766年以前には名取郡が設置されていたことが理解される。しかも、最近の郡山遺跡の調査によって、この遺跡が官衙跡と推定されるに至り（坏に「名取」の刻線文字のあるものと、畿内系・関東系の坏類が出土している）、またその創建年代が7世紀後半まで遡りうるものと考えられる。しかし、今泉城跡の2度の調査においては7・8世紀の遺構や遺物は皆無に近い。

また、和名類聚抄に名取郡の地名として「井上」の名がみえ、これは現在の仙台市井土（井土浜）ではないかとの指摘もある[(2)]。旧藩時代に見える今泉村の東側に隣接する二木村には、

□□□□□土地名有是則□□□上国ノ□□□線丸□□□□正則ト名蒙り□□□天長ニ年空海法師ニ帰依シ灰練仏像ヲ給リ守本尊ト崇敬シ今ニ伝来所持セリ（二木家系譜）

とあり、二木家初代二木正則以来の系譜が示されている[(3)]。「二木家系譜」がどれほどの信憑性があるかは定かではないが、少なくとも名取川北岸の六郷地区では平安時代以後には継続的な集落が形成されたものと考えられる。本遺跡の調査結果では、それ以前にも集落が営まれた形

跡があるが極めて断続的である。

2

12世紀の末期には、源頼朝と平泉藤原氏による奥州合戦が起こり、その最初の戦いが阿津賀山の戦いである。阿津賀山は現在の福島県伊達郡にあり、ちょうど福島・宮城の県境付近で戦いが行なわれている。『吾妻鏡』文治五（1189）年八月七日の条には、

加之於苅田郡、又構城郭、名取広瀬両河引大縄柵、泰衡者陣干国分原鞭楯

とあり、藤原泰衡は名取川・広瀬川に柵をつくり、鞭楯（仙台市榴岡といわれる。）に陣取っていたといわれる。また、同八月十二日には、頼朝は多賀国府に入ったとある。この時の戦いで今泉付近がどのような状況にあったかは知るすべがないが、この戦いにまきこまれていたことは想像されるところで、また、『吾妻鏡』文治五年五月二日の条に

戊子、囚人佐藤庄司、名取郡司、熊野別当は厚免を蒙りて名本所に帰ると云々

とあり、名取郡司・熊野別当が平泉側について参戦したことがある。この合戦の論功行賞で陸奥国内では、葛西・伊沢・千葉・北条・三浦・和田などの御家人が支配者となって登場する。入間田宣夫氏によれば、奥羽の住人がそのまま地頭として留まったものはほとんどなく、また、例外的な場合でも、領主層はなんらかの新旧交代があったという[(4)]。現在の仙台市は、かつての名取郡・宮城郡に属しており、郡地頭職は転々と交替している。このうち仙台周辺には、国分胤通（千葉常胤の五男）が宮城郡国分庄（三十三郷）および名取郡に四千余貫の地(国分系図)、また結城朝光が名取郡内に所領を給与されている（白河古事考)。そして伊沢家景（のちの留守氏）が大河兼任の乱（文治六年）後、陸奥国留守職となり、宮城郡高用名地頭職が与えられた。今泉城を含む名取郡は、「最初、和田義盛に与えられたが、建保元（1213）年和田合戦の後、三浦義村に替えられ、宝治合戦によって三浦氏が滅亡すると北条時頼の所領となった」[(5)]のである。鎌倉時代の中期以後には、村・郷内にも地頭職が成立していたようで、本遺跡の館の成立もこのころであろうと考えられる。とすれば、鎌倉時代の住人は村あるいは郷の地頭クラスの人間であり、本遺跡は地頭クラスの館であろうとの推論が成り立つ。

鎌倉後期には、北条氏の所領が全国にひろがり、比較的早い時期に所領となったところでは、政所（郡）→地頭代（村・郷）といった支配方式が採用された。陸奥国では、遠田・名取などでこの方式が採用されたという[(6)]。現在の名取市上余田字大徳に「政所」という地名が残っており、これはその間の事情を物語るものであろうか。ここには、元徳三（1331）年の板碑があり、また屋敷跡があったと伝えている[(7)]。また、鎌倉末期には、津軽の曽我氏が名取郡土師塚郷・四郎丸郷（若四郎名・おたかせ村）の地頭を兼ねていた。

『石巻斎藤文書』には、

下　平光広　（時頼）（花押）

司令早為陸奥国名取土師塚郷地頭代職事

右人、依勲功之賞可為彼職状如件　以下

宝治元年七月十八日

とあり、また

曽我大郎光高童房名乙丸謹言上

欲早任重代相伝知行被成下安堵国宣備亀鏡

津軽平賀郡内岩楯大平賀沼楯村々幷奥州名取郡四郎丸郷

内若四郎名等全所領彌抽合戦忠勤事（中略）

右岩楯大平賀村々者重代相伝所領知行干今無相違（中略）

次四郎丸郷内若四郎名者、今荒一廃田地、雖為数々年

畠地、光高曽租父宝治合戦勲功所領随一也、而當

知行干今無相違（後略）

とある。このうち、土師塚郷は現在の仙台市藤塚と考えられ、名取川北岸の河口付近に位置している。また、四郎丸郷は仙台市四郎丸付近と考えられている。いずれにしろ、名取郡内における曽我氏の所領は、名取川両岸の河口およびその周辺にあったと考えられ、隣接する今泉城と何らかの関係があったのであろう。

3

鎌倉幕府が倒れ、建武新政が始まると、新たな奥州支配が始まる。すでに後醍醐天皇は、元弘三（1333）年に北畠顕家を陸奥守に任じている。このころには、北条氏余党である北奥羽のの領主層が抵抗を続け、仙台周辺の武士（留守氏・国分氏など）も顕家の軍に従って参戦している。国分氏（第六世盛胤）はこの戦いの勲功の賞として、建武三（1336）年名取郡の内、飯田・日辺・今泉を賜ったという。

建武三年正月源顕家ノ軍ニ従ヒテ各所ニ転載シテ武功ヲ擢デ

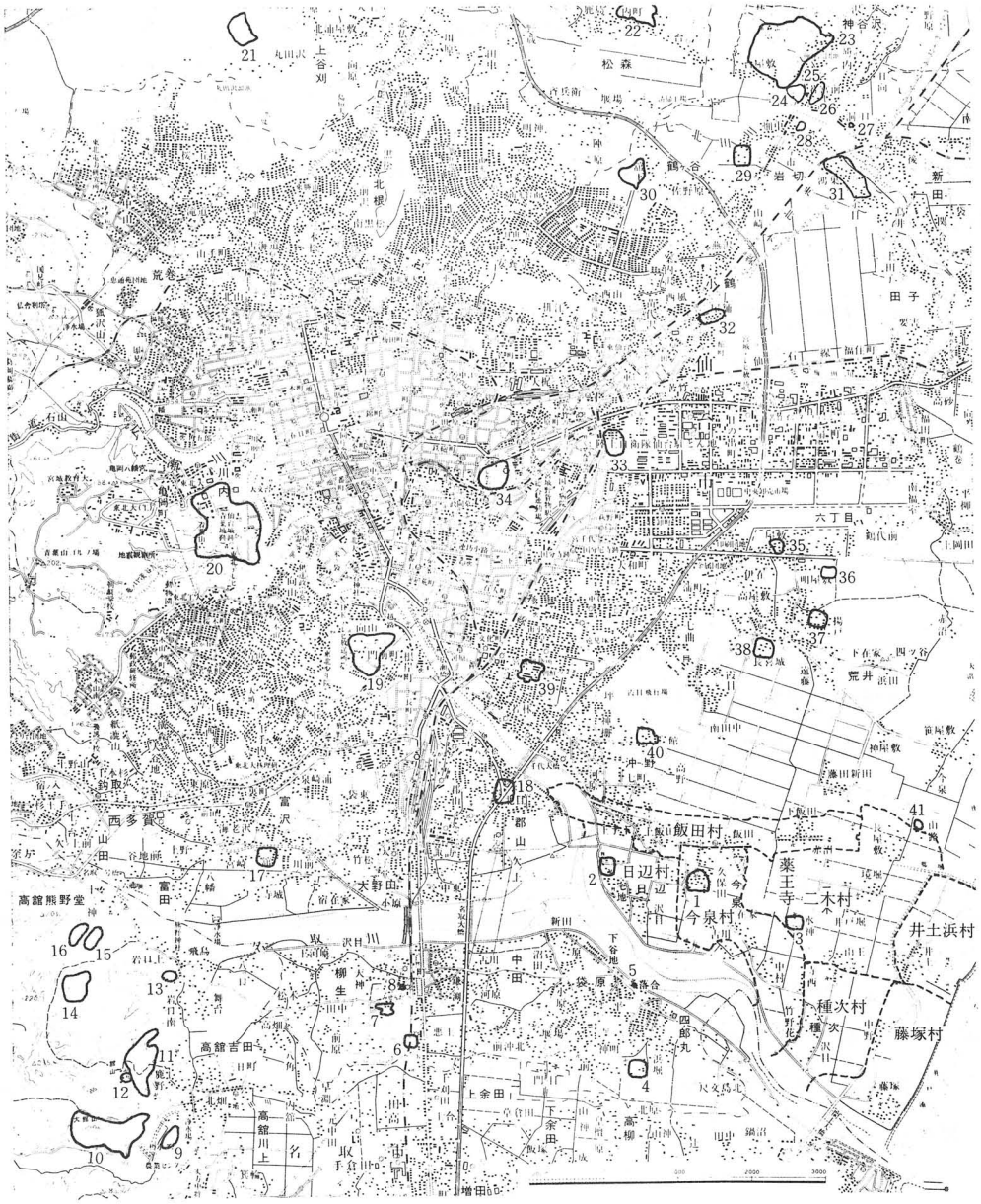
同年二月七日奥州国分荘名取郡ノ内飯田・日辺・今泉ノ邑ヲ

賜ハル（国分氏系図）

とある。したがって、逆に鎌倉時代の飯田・日辺・今泉は北条氏の所領だった可能性が考えられる。

しかし、留守氏・国分氏とも足利氏（北朝）に転じて戦うようになる。また、正平五(1350)年には、足利尊氏・直義の間に内紛があり、奥州探題の吉良貞定・畠山高国らも二派に分れて戦うことになる（岩切城合戦)。この時、国分氏は吉良方に、留守氏は畠山方についたが、吉良方が勝利を納め、国分氏は勢力を増大させ、留守氏は没落したとされる（餘目記録)。

また粟野氏は、もと越中国粟野庄の住人で、鎌倉時代には、伊達郡・信夫郡に所領をもって



1	今泉城跡	縄文～江戸	15	小館(古館)跡	中世	28	今市遺跡	平安・中世
2	日辺館跡	室町	16	黒崎城跡	中世	29	稲荷館跡	中世
3	二木館跡	中世末	17	富沢館跡	室町	30	笹森館跡	中世
4	四郎丸館跡	鎌倉	18	北目城跡	室町・江戸	31	鴻ノ巣遺跡	古墳・平安・中世
5	落合観音堂板碑群	中世	19	茂ヶ崎城跡	中世	32	小鶴城跡	中世
6	前田館跡	中世	20	仙台城跡	江戸	33	南ノ目城跡	中世
7	安久東遺跡	古代～江戸	21	長命館跡	鎌倉	34	国分鞭館跡	中世
8	伊豆野権現坂碑群	中世	22	松森城跡	中世	35	北屋敷遺跡	古代～明治
9	桑島館跡	中世	23	高森城跡(岩切城)	中世	36	地蔵浦遺跡	中世
10	大館山館跡	中世	24	東光寺城跡	中世	37	荒井館跡	中世
11	高館城跡	中世		同城板碑群磨崖仏	中世	38	長喜城館跡	中世
12	熊野那智神社	中・近世	25	地蔵堂板碑群	中世	39	若林城跡	(中)、近世
13	熊野経塚	中世	26	若宮前遺跡	古代・近世	40	沖野城跡	中世
14	熊野堂大館跡	中世	27	洞ノ口板碑群	中世	41	岡崎囲遺跡	中・近世

第122図　中・近世遺跡分布　破線は明治17年以前の村

いたが、粟野重直藤三郎の時に北朝について奥州名取荘（名取郡）に二千余貫を賜わり、康永二（1343）年に名取郡根岸城に移住した。のちの寛正年中（1460～66）には同郡北目城に移っている。

さて、北朝方の内紛後、南朝方が勢力をもり返し、国府周辺では再び南朝・北朝の戦いが活発に行なわれている。これらの戦いの一つに広瀬川の戦いがある。『白河文書』観応三(1351)年十月二十九日吉良貞家状に

結城参河守朝常甲恩賞事、申状一通謹令進覧候、去年宇津峯宮
伊達飛弾前司、田村庄司一族及宮城郡山村宮以下凶徒、寄一来名取
郡之時、差一進代官結城又七兵衛尉幷軍勢、同十一月廿二日、
於同郡広瀬川、致軍忠之尅、郎徒被疵候（後略）

とある。

ところで、この頃の国分氏の動静をみると、前述したように北朝方につき、また、北朝方の内紛時には、勝大将である吉良方に属していた。しかし、その後理由は不明であるが、国分寺郷の所領が没収され、相馬氏の所領になったという。『相馬文書』には、

陸奥国宮城郡国分寺半分国分淡路守幷一族等跡内地頭職事、為八幡介景朝跡之替所宛行也、
早守先例可致沙汰之状如件

貞治二年七月十一日

相馬讃岐守殿

正平十（1355）年以降、奥州は足利方の支配下となり元中九（1392）年には南北朝は統一される。

今泉城跡より検出された15号溝や31号溝は、およそこの時期ころのもので、14世紀終末～15世紀前半（Ⅲ期後半）の所産と考えられる。つまり、11号・21号溝がほぼその機能を果たさなくなった段階で、新に構築された溝であり、館を区画する掘と考えられる。この15号・31号溝は、Ⅳ期には埋没が完了している。

4

仙台周辺では、南北朝時代に一時没落した留守氏が本領を安堵され、また、国分氏も一部所領を没収されたが、両者とも再び勢力を拡大していった。室町時代には、伊達氏の勢力圏がしだいに北上し、戦国期には仙台周辺も伊達氏の勢力下に入っている。国分氏は応仁・文明頃伊達氏と戦い、文明四（1472）年に和睦している。また、留守氏は、すでに永和三（1377）年に伊達氏と一揆契約（伊達家文書）を結び、文明のころには伊達氏から入嗣して臣従化している。そして、粟野氏も文明年中には、伊達成宗と戦い服属している。しかし、これらの諸領主は、伊達氏の家臣になったのではなく、独立領主として地位を保っており、しだいに大名化してい

くのである。戦国末期には、先の粟野氏は国分氏の家臣となっている（国分文書）。

ところで、今泉村にはいくつかの寺社が存在しているが、このうち宝泉寺は大永三（1523）年に、円乗寺は元亀二（1571）年に開山したという。宝泉寺は『封内風土記』によれば、

今泉邑　（中略）如意山寳泉寺　曹洞宗　本郡宮沢宗禅寺末寺伝云、後柏原帝大永三年宗禅寺第四世海印舜巨和尚開山（後略）

とある。この中の宗禅寺は、名取郡根岸村宮沢（現仙台市根岸町）にあり、文安（1444）年に開山といわれ、ちょうど粟野氏が初めて名取郡に所領を賜った翌年になる。すなわち、前述したごとく、康永二（1443）年に名取郡に所領をもらい、根岸城（現茂ヶ崎城）に移住し、寛正年中に同郡北目城に移っている。のちの元和二（1616）年に宗禅寺は、北目城主粟野大膳大夫国重の菩提寺となっている。したがって、戦国期以来、宗禅寺は粟野氏との関連が極めて強いと考えられよう。この宗禅寺の末寺である宝泉寺も、粟野氏と何らかの関連があったという推測が可能であろう。

国分氏の領地は、三十三ヶ村あったといわれるが、今泉村などの名取川下流域北岸の六郷地区の村は含まれていない。したがって、国分氏が六郷周辺の領地を家臣である粟野氏に与えたもの、とは考えられないであろうか。『封内風土記』によれば、

（前略）茂ヶ崎　在根岸邑　古壘也　名跡志日　後小松帝　応永中
粟野大膳諱不伝者　領名取郡北方三十三郷　居此城

とあり、また、『仙台領古城書立之覚』茂ヶ崎城の項には、

右城主粟野大膳但名取郡北方三十三郷之旗頭之由申伝候

とある。名取郡北方三十三郷には、今泉村など六郷の村々が含まれている。また、今泉城の南東には小在家という地名があり、中世における今泉城の在家の名残りであろう。この小在家には、現在でも粟野姓を名のる人が多い。

一方、『仙台領古城書立之覚』にある今泉城主須田玄蕃は、上述のことなどを考慮すれば、粟野氏あるいは国分氏の家臣であると考えられよう。特に前者の可能性が強い。この点については、すでに飯沼氏も、須田玄蕃は「国分氏或は其の一門の家中ではなかったか」と指摘している[8]。今泉城は、先の『仙台領古城書立之覚』『仙台領古城書上』のいずれにも粟野氏関係の城の中に記載されていることから、粟野氏との関連が強いと考えられ、このことは前述の指摘の傍証となろう。

『仙台領古城書立之覚』には、

今泉村
一平今泉城　東西三十六間　南北四十五間
右城主須田玄蕃ト申者百年前迄居住仕候　西ニ掘形有リ

四重之土手有り

とある。『仙台領古城書立之覚』は享保十三(1728)年の写本であり、その原本は、延宝五(1677)年に幕府に提出した『仙台領古城書上』と考えられる。したがって、「百年前迄」の記述は1577年となり、須田玄蕃はおよそ天正年間以前に住んでいたことになろう。また、先の宝泉寺（あるいは円乗寺）は須田氏の氏寺的性格をもつものと考えられないだろうか。

天正年間の国分氏の動向をみると、伊達晴宗の五男彦九郎政重（国分第十七世盛重）が家督をついでいる。こののち、国分氏には政重をめぐって、家中騒動が起きている（伊達家治家記録・伊達文書)。また、国分系図には、

慶長元年三月、故アリテ国分城ヲ没落ス

とあり、このころには国分氏は滅亡し、その一部は伊達政宗の家臣になっている。

一方、粟野氏の動向をみると、大崎合戦（天正十六年、伊達政宗と宮城県北の大崎地方を領地としていた大崎氏との戦い）に参戦し、大任を果している。したがって、領地も安堵されたものと考えられる。

天正十七～十八（1589～90）年には、伊達政宗の所領は宮城県の南半に及んでいる[9]。豊臣秀吉の小田原征伐後に安堵された所領の中に、名取・宮城の名がみえる。今回の調査では、1号溝（館に伴う掘と考えられる）など今泉城Ⅳ期の遺構群が、およそこの時期に相当する。この1号溝からは、数多くの桃山～江戸初期の陶磁器が出土している。須田玄蕃が天正年間ころまで住んでいたとすれば、1号溝が江戸初期ころまで機能していたと考えられることから、須田玄蕃以後もこの館に武士が住んでいたことが推測される。しかし、須田氏なのか、粟野氏あるいは伊達氏の家臣なのか、にわかに決めがたい。

5

伊達政宗は、慶長六（1601）年に仙台城を普請し、北目城から移っている。その後、仙台藩では六郷地区などで盛んに新田開発が行なわれている。飯沼氏によれば[10]、慶長年間頃に郷六(現在の宮城町郷六)の住人である佐藤出雲家友が二木村三本塚に帰農し、開発を行ったという（佐藤家系譜)。また、『政宗君治家録引證記』慶長十六（1611）年十月二十八日の条には、

一、十月廿八日己刻、大地震、津波入候ニ御分領中ニ而人千七百八十三人、牛馬八十五疋死ト也

とあり、この時、名取川の河口付近の村は相当な被害にあっている。元和（1615～）頃には、福島県の相馬地方の相沢・大友・柴崎等の武士が荒所開発に当ったという。現在の今泉城跡及びその周辺には、大友・遠藤姓の人が多く、六郷地区内では現在でも相沢・大友姓が多くみられるのも、先の理由によるためであろう。一方、今泉城跡の北東に位置する下飯田は、寛永二（1625）年に留守家水沢城主宗利が小野新右衛門常勝に開墾を命じ、また、その後水沢に居住

する家臣42名を飯田村・今泉村等に帰農させている。災害の復旧や仙台藩の財政の建直しのために、荒所や新田開発が盛んに行われ、おそくとも17世紀前半ころ（元和～寛永）までには、純農村に変貌したものと考えられる（一応17世紀前半以後をⅤ期として扱っている)。ところで、前述した下飯田にある薬王寺から板碑が発見され、この碑は正安元（1299）年の「胎蔵界大日如来」をあらわしたものであるという。飯沼氏によれば、下飯田は藩政期の新田部落であり、この板碑は元来今泉村にあったと考えられると指摘している[11]。そうであるならば、この板碑は今泉城Ⅱ期に成立した館跡と関連するものであろう。

さて、江戸時代になると、名取川や木曳堀を利用した水運交通が盛んに利用されるようになり、名取川の水量の豊富さと相まって、馬渡船・平駄船・高瀬船が航行した。現在の仙台市四郎丸落合、日辺駄賃場は船着場だといわれている。このことは、中世にも水運が利用されていたことを推測させる。今泉城跡出土の多数の陶磁器類等は、こうした水運を利用してもたらされたものであろうか。

なお文末ではあるが、県立図書館吉岡一男氏に協力いただき、また文献では特に、大石直正他『中世奥羽の世界』、仙台市史３・８、飯沼勇義『六郷部落の歴史的考察(一)・(二)』に負うところが大である。改めて感謝申し上げたい。

注

(1)江戸時代以前は、日辺村・飯田村・今泉村・二木村・藤塚村等に分かれていたが、明治に入って統合され六郷村となった。現在では仙台市の一部となっている。

(2)飯沼勇義　1900　「六郷部落の歴史的考察(一)」『宮城県の歴史と地理』　国書刊行

(3)　同　　上

(4)入間田宣夫　1978　「鎌倉幕府と奥羽両国」『中世奥羽の世界』　P78　東京大学出版会

(5)　同　　上

(6)　同　　上

(7)名取市　　『名取市史』

(8)飯沼勇義　1900　「六郷部落の歴史的考察(二)」『宮城県の歴史と地理』

(9)小林清治　1959　『伊達政宗』人物叢書28　吉川弘文館

(10)(2)に同じ

(11)(8)に同じ

５．遺跡の構成 ―まとめにかえて―

今泉城跡は、縄文時代後期から江戸時代という極めて長期にわたる複合遺跡である。したが